

ウッドバッジ実修所カブスカウトコース第134期参加報告



ウッドバッジ実修所 カブスカウト課程 第134期
平成16年4月29日～5月4日 於 日本連盟那須野営場

日程 2004年4月29日～5月4日

場所 日本連盟那須野営場

所長 深野幸江リーダートレーナー（東京都連）

神奈川連盟 横浜第96団 中川和之

概要

ウッドバッジ実修所カブスカウトコース第134期の基本訓練は、那須野営場で6日間に渡って行われた。参加者は、16県連から41人（うち1人がご家族のご不幸のため途中で帰宅）。申し込みの人数が多く、カブ隊の隊長、副長に限ったため、団からの指示での参加者より自発的参加者が3倍以上。深野所長以下13人の所員による15のセッションに熱心に取り組んだ。

研修所と異なるためか、成人指導者の訓練方法の変更なのか、野営の技術を競うような優秀班の競争などもなく、2度、夕食が用意されるなど、講習が中心のプログラムだった。5日目の午前中までは好天に恵まれ、営火と撤収はあいにくの雨天となったが、体調を崩すことなく、実修所を終えることが出来た。

今後は、3カ月後をメドに提出する奉仕実績訓練の課題を、計画を立てて実施し、96団カブ隊活動の充実を図っていこうと考えている。スカウティングに復帰して以降、これまでの自分の活動に最も欠けていたのは、振り返り、評価・反省であり、この点を最も重視してより充実した隊活動につなげていきたい。奉仕実績訓練であげたこと以外にも、実修所で学び、今後の活動に活かせるようなことも多々あり、この報告書に記すようにした。

この実修所のための課題研修や奉仕実績訓練によって、各地のスカウト活動で抱える課題と解決の方法の現場の生の状況を、各県連や日本連盟が把握することが出来る。この研修システムが、現場のニーズを反映したスカウティング実践の一環になっていることも、この報告書をまとめながら気付いた。PDCAサイクルが循環しているのである。

課題研修

実修所への参加は、正直なところ（1）実修所は面白い（2）那須野営場は良いキャンプ場だ（3）ボーイ課程の研修所から5年経っており、そろそろ新しい学びが欲しい程度のものであり、何とか6日連続の休みを調整するのが優先だった。

そのため、事前研修や事後の奉仕実績訓練について、ほとんど意識をしておらず、事前研修の課題を持参しての坂本地区コミッショナーとの話し合いも準備が不十分だった。課題研修のためにあげた事前課題と列記したポイントは次の通り。申し込み時に提出した書類は別に添付した。

- 課題1：当該課程の「隊長ハンドブック」を精読し、自隊の実情と違うところを列記してください。
 - ・人数と組織
 - ・プログラムの組み立て
- 課題2：課題1をもとに、身近なコミッショナーと話し合い、その内容を簡潔にまとめてください。
 - ・組拡について
 - ・会計の問題とBVS隊との住み分けについて
 - ・プログラムの組み立てについて
- 課題3 この実習所で学びたいことを列記してください。
 - ・組集会の開催プロセス
 - ・リーダー・保護者、団委員間の無理のない役割分担のあり方。
 - ・継続的に評価と反省を可能にするためのプログラム運営。
 - ・カブ年代スカウトの集合前、解散後の安全について。
 - ・ビーバー隊、ボーイ隊との連携のあり方。

毎日の研修と学び

1日目

●開所式、オリエンテーション

午前9時半から、野営場脇の三島神社境内で受付開始のため、同6時42分大船発の東海道線、東京から東北新幹線に乗り、同9時1分に那須塩原着。同時に降りた沖縄県連からの参加者とタクシーで現地着。既に、過半の参加者が集まっており、講習会で使う資料などを購入した後、6つのグループごとに分かれて集合。10時の受付終了を待たずに野営場に移動した。

荷物を持ったまま、那須与一のトーテムポールのあるつつじ通りに整列し、「ここから娑婆とはお別れ」と言われながら、「道心門」という木製のゲートをくぐり抜け、カブ広場での開所式に臨んだ。セレモニーに引き続いて、写真撮影の予定だったが時間が早かったため先にグループごとに昼食とオリエンテーションを行った。

各グループには、チューターと称する学習支援のためのスタッフが付く。われわれのグループは、福岡県連の伊藤知子副リーダートレーナーが担当。年齢順と推定された並ぶ順番では前から3番目。年齢層的には、平均年齢は40代と思われる。

私が入ったグループは男性6人、女性1人の7人。大阪茨木3団の間野智之CS隊長、東京中央6団の長田光一郎CS隊長、千葉四街道1団の笠井智子CS隊長、愛知岡崎8団の高瀬浩二CS隊長、岡山浅口1団の金光清治CS隊長、兵庫西宮16団の原田雅史CS隊長。原田君だけが、現役ローバー。何と、彼の団の先輩と私は兵庫でのCS研修所を一緒に参加しており、高瀬、金光の両氏は高校の同窓だという。奇遇である。

自己紹介やグループの名前決め、役務の決定などがスムーズに決まっていく。名札に緑の線があったので「うぐいす班」に。班呼は「ホケキョ」。班長、次長とタイムキーパー、食事、野営工作、かまど、備品、記録・広報の担当分けとし、いきなり初日から班長を拝命した。セッションの司会は班長、次長が発表、記録・広報が記録と分担することにし、6日間を通した安全担当を原田君、衛生担当が笠井さん、健康担当とキャンプファイヤー委員に高瀬さんとなった。

他のグループが、野営場内を見学した後に昼食を食べる中で、我がうぐいす班だけは、最初からお弁当を食べるという独自の行動を取る。その後、何かにつけて、うぐいす班は積極的な行動をしたが、4日目にそれが裏目に出て、大変な役割を仰せつかるのである。

●セッション1＝実修所について

WB実修所は、(1)互いの体験を交流し、(2)指導技術の改善を図り、(3)スカウト運動の目的、方法の特色、価値を一層深く確信し、(4)指導者の能力向上を図る-ことが目的と説明され、以下の9つの目標を示された。

- ・運動の理念を再認識し、成人指導者として自己の生活に反映実践させる。
- ・方法の特色を認識し、効果的な活用に理解を深める。
- ・スカウトのニーズを積極的に取り入れ、発展させる。
- ・環境教育とスカウティングの関係について認識を深める。
- ・プログラムプロセスを状況に合わせて効果的に活用する。
- ・隊運営の効果的な進め方、スカウトの参加の重要性を認識し、方法を考える。
- ・指導者の役割・責任を深く確信し、多様な学習の必要性を認識する。
- ・あらゆる成人の活用を考える。
- ・カブ部門の効果的な展開について、理解を深める。

これらの目標を小グループのグループワークやキャンプ生活を通じて達成するのが実修所だという。

実修所は、事前の課題研修と、この5泊6日のキャンプで行う基本訓練、さらに原隊で取り組む奉仕実績訓練の3部構成であり、原隊を改善させる取り組みの報告が必要という。「決してうまくいなくても、その反省でもよい」とのことであった。私は、ここに来て、奉仕実績訓練が待ち受けていることを、初めて認識した。

その後、キャンプ生活はかつてのようなスカウト扱いではなく、成人指導者としての自主性を重んじた運営をしており、点検講評もさまざまな方法で行い、学びをしてほしいとの話があった。

また、各セッションごとに自己評価するシートに記入が求められた。理解度をA, B, Cの3段階で行う自己評価はAとし、「最初に時間があつたのでグループの仲間意識を持ちやすかつた」とコメントを記入した。

●セッション2＝指導者の役割と責務

このセッションの目標は、指導者の役割と責務の意味と重要性を説明出来るという。

隊長ハンドブックの中には、副長の育成、プログラムの立案展開、デンリーダー・デンコーチの指導、隊集会や行事の主催、保護者と暖簾形、隊の登録、隊の記録、団・育成団体への報告、地区との関係があげられており、スカウトだけに目を向けるのではなく、保護者、地域、指導者、モノ、カネにも目を向けることと指摘された。

個人作業として、A3の「自隊の課題の解決と学習計画」と題したワークシートに、(1)あなたの隊の課題(困ったこと)(2)原因となるべき事柄(3)解決の手段(4)隊指導者として課題解決に必要な要素(5)基本訓練中の達成機会-について、課題研修であげた項目を元にして、(1)隊の会議が十分出来ておらず、プログラムの組み立てに問題、(2)スカウトの人数が少ない、(3)BVS 隊との会計や活動の分離、(4)組集会が出来ていない、(5)プログラムにみんなのアイデアが活かせていない-の5項目をあげた。

個人作業の後、それぞれが書いたものを元にグループで原隊の状況を報告し合った。

ここでの自己評価もAとし、「成人の役割分担、自主的に動いてもらうための方法が課題」とコメントを記した。

●セッション3＝スカウト運動

いきなり、規定集にある日本連盟の目的についての、穴埋めワークシートに取り組んだ。

財団法人ボーイスカウト日本連盟(以下「本連盟」という)は、ボーイスカウトの(1)を通じ、(2)がその(3)により自らの(4)を築き、社会に(5)できる能力と人生に役立つ(6)を体得し、かつ(7)、(8)、(9)及び(10)と(11)を把握し、(12)出来るよう教育することを目的とする。(順に、組織、青少年、自発活動、健康、貢献、技能、誠実、勇気、自信、国際愛、人道主義、実践)。穴埋めの文言は20の中から選択する方式だったが、12のうち5つも間違えてしまった。

さらに、世界スカウト機構の規約と日本連盟の教育規定の目的と基本方針を比較して、共通点を書き出すグループワーク。世界機構の規約にある「方法」が、どう具体化されているかをグループで読み解いて発表した。

うぐいす班の発表では、野外活動を中心に実際に体験して学び、班・組の小グループ活動によって自立や自己統治、協力しあい、指導力も高め、上進制度や年代別のバッジシステムという累進的で活気のあるプログラムとして具体化しているとまとめた。

また、世界スカウト会議の決議によって、青少年の意志決定への参画が重視されるようになり、かつては年長者が多かつた各種の会合で、ベンチャー、ローバー年代がより中心になるように変化してきたことも理解した。

最後に、福岡大学の研究室でまとめられた「現代教育の忘れ物」でまとめられた5つの欠損体験「自然体験、異年齢集団体験、困難体制体験、社会奉仕体験、自発活動体験」は、そのままスカウティングであると説明された。

ここでの自己評価はAとしたが、セッション後、直ちに設営に移行するため、コメントを書く間はなかった。

●設営

設営について、必要資機材や食材の配給、サイトの使い方の注意事項などがあった。昔は入所といい、スカウト体験をさせたが、今は成人指導者としての参加であり、そこから考えるようにとの話もあった。

1グループに、ジャンボリーテント（指導者用）が2張り、ドームテントが1張り、食堂フライが1張り。各サイトには、シェルターと称する東屋があり、固定の机と椅子が用意されている。かまどは、立ちかまどではなく、鉄のフレームでできた台の上に土と耐火レンガを載せる方式だった。また、ガスランタンと、ガスバーナーが一つずつ（ボンベは二つずつ）供与され、ガスは必要に応じて新品に交換された。

設営の開始は、予定を30分ぐらい過ぎており、食事とかまど担当の2人は直ちに夕食作りに入り、残る5人で設営を行った。途中、安全と健康、衛生の各委員会が開かれ、各グループからの委員によって、活動の方針が決められた。安全委員会は、毎日、開催された。（2日目に、別のグループで、薪割り中に手を2針縫うけがをしたこともあり、安全委員会は連日、安全確認の会合を行っている）

夕食は、周囲からごはんの歌が聞こえないうちに食べ出すことができ、夜のセッションまでにある程度の片付けも出来た。

●セッション4＝ちかいについて

期間中、唯一の夜間セッションは、午後7時半から本館講堂で行われた。

成田主任は、まず事前に選んでおいた参加者を呼び出し、課題研修の資料を材料に「ちかい」を活動にどう生かすかについてインタビュー形式で、やりとりを行った。いきなり、内容にはいるより、導入として分かりやすく、面白いやり方だと感じた。

グループ作業として、「ちかいを正しく理解させるため、直面している問題（困っていることなど）は？」とのワークシートと、それに対してどのような手だてを打ったか・打つと良いかのワークシートに記入し、グループごとにまとめていった。

うぐいす班では、人の話を聞けない、セレモニーに集中出来ない、返事やお礼をしない、自己中、ゲームでルール破りをする、言葉遣いが悪いなどなどの現状があげられた。

それに対して、「怒るのではなく良いことをしたスカウトを誉める」、「悪いことをやっても自分で気付いたり反省したら誉める」、「くまからしか、うさぎを指導させる」、「くま集会で反省会をして、くまとしての自覚を促す」、「プログラムをきちんと準備し、メリハリを付ける」-などという手段が提起された。

議論をしながら、準備不足、うち合わせ不足の中に、スカウトに対して、どう評価するのかを明確に示し、そのなかにやくそくとさだめを盛り込んでいくことも可能だと考えた。

成田主任所員からは、言葉を先に出して従わせるのではなく、カブ年代にあったやくそく・さだめの実践を考えること、指導者が身をもって実行することというまとめがあった。

このセッションの自己評価はBであった。自己評価は随時、見直すよう指示があり、ちなみにこの項目は、おきてについての話などを聞いて翌30日にはAになり、プログラム企画を実施した2日にはまたBに、3日にAと評価している。コメントとしては、「ちかい、やくそくを理解させるために、必要な準備をきちんとやる。その上で、指導者が余裕を持ったプログラムが大切」と記した。

ノートには「集会の最初に、今日の集会とやくそく、さだめとの関係について話をしたうえで、集会の

最後にこの点から評価する」と記した。これは、集会前のリーダーうち合わせで確認するだけでも、実践が可能な方法である。

●スカウトタウンサービス

最後に、スカウトタウンについての話があった。聖職者の元におこなうものではなく、スカウトのスカウト自身によるスカウトのための礼拝がスカウトタウンであり、ちかいとおきての実践のためのである。カブ年代の子供でも、やって良いこと、悪いことは知っているが、実践にはつながらない。そのスカウトに対して、生きていく、ではなく、生かされていることを感じ、他者へも同じような視点で接せられるような気持ちを持ってもらうきっかけを提供することもできるのがスカウトタウンであるという。

実修所では、当番班が朝の集会の進行と、ゲーム、スカウトタウンを担当。午後のセッションの前にも、別の班からスカウトタウンを行う人にでもってもらうやり方をとっていた。

この日は、班ごとの振りかえりの時間や入浴の後に、班ごとにスカウトタウンをするように指示があり、私が2年前の夏のキャンプで、神谷さんが空を見ながらしてくれた話を思い出しながら、宇宙のちりと私たちのつながりについての大きなタイムスケールの話は何の準備もなくしたのだが、時間もなく、納得するモノにはならなかった。

翌日の夜にも、同様に班内で間野氏がスカウトタウンを行い、同僚の突然死の話から、毎朝起きてこられることの幸せについての話をされた。同じ話を元に、全体の場でも行ったが、2度目だったのと時間を短くされたためか、班で聞いた時のほうが良い出来だったと感じた。

●班サイトで

初日の夜と2日目の朝の時間は、実修所側からは何のアナウンスもなかったため、うぐいす班は早く寝て早く起きることにし、午後11時すぎにはテントに入った。私も、テントの中で画用紙に「デイリーうぐいす」を書き上げ、零時前には寝ることが出来た。

朝は、午前5時ごろから起きて、設営の続きと、朝食作りを行った。日中や寝る時にはそれほど感じなかったが、明け方には気温が下がり、明け方は寒くて目が覚めた人もいた。近くの鶏のときの声も午前4時ごろからにぎやかでもあった。班長ということだったためか、初日で緊張していたためか、疲れや寝不足を感じずに起きて活動をした。しかし、2晩目以降からは、この日ほどの目覚めはなかった。

中央6団の長田隊長から、テントのウォールをたたみ上げるのではなく、細引きを使ってウォールの穴同士を結んで地面から浮かし、入口も細引きで引っ張って広げる乾燥方法を教わり、点検講評でも紹介された。また、竹ぼうきでサイト内の落ち葉を掃き掃除をすると、居心地がとてよくなることも長田隊長から教わった。落ち葉などがあるのが当たり前だと思っていたが、地面がきれいになると、安全や衛生に注意し、野営工作の改善を図ろうという気がよりしてくるから不思議である。まさに、所長が話した「部屋の壁がなく、電気や水道、ガスがないだけで、みなさんの家と同じであり、快適な生活環境を作りたい」との言葉通りであった。

午前7時50分から点検、点検講評、同8時20分から朝礼。この日は所員での展開だったが、3日目からは当番班の仕事となり、うぐいす班は4日目に担当した。集合、司会、国旗、ソング、ゲームを分担して行った。

2日目

●セッション5＝おきてについて

セッション4と同様に、インタビュー形式からスタートした。知的障害を持つ子が大半の松戸7団の富永隊長が、普段はほとんど話せないカブが、そばにいた健常者のBVSが落としたハンカチ？をさっと拾

ってあげて「ハイ」と言って渡した姿を見て、健常な子が多いBVSの手をCSがしっかり握って歩くというプログラムの実践につながったという話をしてくれた。

おきての実践を組み入れたプログラムについて、隊長として指導すべきこと、援助すべきことを具体的にまとめ、さらに「指導・援助すべきこと」は、「なぜそうしなければならないか」をまとめ、それをグループごとに発表した。

「指導」とは、隊長がスカウトや指導者を目標達成のために意図的に教え導くことで、明確に意図を持って実践する。「援助」とは、スカウトや指導者の求めに応じて助けることであり、スカウトの興味を促したり、より達成感を感じさせることで次の集会を楽しみにさせることだとの確認があった。

全体のグループ作業の前に、数分間、自分のワークシートに書き出した後に、それぞれから発表してもらって討議を進めた。具体的な事例をあげるようにという指導があり、現場の場面を考えながら、何が出来るかを考えることができた。具体的に「すべきこと」で出た項目を以下に記しておく。

- ・隊長としてやりたいプログラムの目的をはっきり示す。
- ・出てきたプログラムに対して、きちんと意味づけをする。
- ・プログラムに組長会議をきちんと位置づけておく。
- ・協力出来ないと成功しないゲームを入れる。
- ・守るべきこと、自分から行動すべきことを、ゲーム形式（そろったらOKのビンゴカードなど）にして競わせる。

- ・ゲームを実施する際などに、ルールを明確に伝える。
- ・交通機関を利用する時の注意事項を明確にする。
- ・くま、しかが、年下のスカウトにロープを教えさせるなど、面倒見させるようにする。
- ・荷物は自分でまとめさせるようにする。
- ・ソングなどを効果的に活用し、元気に行動させる。
- ・賞をあげて誉める。
- ・集会の内容を自己評価させ、言葉を探させることで、おきてへの気づきを促す。

ここでの自己評価はAとなった。コメントでも「昨日の『ちかい』より具体的に考えることが出来た」と書いた。2日目に入り、思考回路がスカウト化してきたこともあるのだろう。素直に入ってくるようだ。

●セッション6＝安全について

ここでは、3つの課題についてワークシートに記入しながらグループ討議を行った。

課題1は「集会プログラムで安全についてどのような項目を盛り込んだか」で、それぞれ原隊での活動で注意していることがあげられた。虫などへの注意もあげられていたが、最終日に自分がその対処法をとらずにアブに刺される羽目になった。

課題2は、営火でしっぽ取りゲームをし、スカウトが転んで額に傷を負ったが、元気だったので簡単な治療で済ませて、翌朝になって病院に搬送し2針縫ったという事件事例を元に、プログラムの問題点と、事故後の処置の問題点の討議をした。夏のキャンプであるのに、スカウトに比べてリーダー数が少ない、プログラムの決定が直前、内容が不適切などの問題点が指摘されたが、この事例は担当したトレーナーの団で実際にあったことだといい、どこの団でもありえないことではないとの指摘があった。また、けがをしてからの対処で、隊長が一人で判断し続けている問題点も分かり、プログラムの安全担当の重要性が再認識された。

3つ目の課題は、スカウトへの安全教育と、保護者への安全教育についてのまとめ。保護者に対してけがをした時の対策を和気あいあいとしたような保護者会の場できちんと説明しておくことの大切さが分かった。

また、けがなどに対する安全確保以外に、スカウトのプライバシーを守るという責務も指導者にあるとも指摘された。

このセッションの自己評価はAである。特にコメントは記していないが、保護者への安全教育という視点や、プログラムの進行担当ではなく違う目で安全を見る担当が必要である。

●セッション7＝環境教育

配給された弁当の昼食後、エクステンションスカウティングと言われるスカウティングをやや上げた先にある活動の一つである環境教育についての講義とグループワークを行った。スカウティングの中の環境教育は、知る＝知識理解、行う＝実践活動、呼びかける＝啓発活動の3つの柱で行われているといい、「君が受け付いた時より、少しでもよくしてあとに残すように努力しよう」というBPの言葉は、環境教育にこそ当てはまると言えるとも。

さまざまな資料が日本連盟などでも作られているが、スカウトの学校での教科書を見せてもらい、学校でどのような環境教育が行われているかを知っておくことは大切であるという。学校の教科書に、スカウティングのネタが含まれているということは発見であった。

グループワークとしては、(1) 絶滅に瀕している野生動植物の保護、(2) 自然環境の破壊の現状、のいずれかについて、カブが知るためのプログラムのアイデアをまとめた。うぐいす班は、2の課題を選び、「地球防衛隊」をテーマに、身近な自然の破壊を見せて気づきを促すこととし、里山ハイキングを考え、たくさんの実施したいプログラム案を考えた。事前の図書館での資料調べなどの組集会や、自然観察、自然追跡ハイク、木の音を聞いたり、水の循環について考えたり、クイズ形式で遊んだりするアイデアが出され、クリア章やチャレンジ章の進歩にも関係することが理解出来た。

ユネスコの提唱する教育の4本柱は、知ることを学ぶ、為すことを学ぶ、共に生きることを学ぶ、人間として生きることを学ぶであり、スカウティングそのものである。スカウティングは子供会と違って、教育団体であるという押さえもあった。

これを調べていく中で、日連の2002年(平成14年)に向けてのアクション・プランのページに行き着いた。

<http://www.scout.or.jp/j/campaign/2002/plan2/index.html>

ここで紹介されている「学習：秘められた宝、ユネスコ「21世紀教育国際委員会」編(天城勲訳、1997ぎょうせい)で訳されている学習の4本柱が学芸大の教育工学研究室のホームページにあった。

(1) 知ることを学ぶ (Learning to know)

十分に幅の広い一般教養をもちながら、特定の課題については、深く学習する機会を得ながら「知ることを学ぶ」

(2) 為すことを学ぶ (Learning to do)

多様な状況に対処し、他者と共に働く能力を涵養するために。

(3) (他者と) 共に生きることを学ぶ (Learning to live together, Learning to live with others)

一つの目的のために、共に働き、人間関係の反目をいかに解決するかを学びながら、多様性の価値と相互理解と平和の精神に基づいて、他者を理解し、相互依存を評価すること。

(4) 人間として生きることを学ぶ (Learning to be)

個人の人格をいっそう発達させ、自律心、判断力、責任感をもってことに当たることができるよう、「人間としていかに生きるかを学ぶ」。

このセッションの自己評価はAである。コメントとして、「特別に考えるのではなく、通常の活動に取り入れられる可能性が分かった」と記した。

●セッション8＝カブスカウト活動

ここでは、まず、カブスカウト活動の11の目標の穴埋めをした。

- ・神（仏）を（うやまい）、自分の（責任）を認識させる。
- ・（自然）に親しみ（愛護）する（心）を育てる。
- ・（小）グループの中で、相互に（影響）しあう機会を提供する。
- ・（所属）意識を伸ばし、目的を達成した時の（充実）感を感じさせる。
- ・自ら考え判断し、（決断）する力を養う。
- ・（健康）と（安全）について認識させる。
- ・（好奇）心と（冒険）心を満足させる。
- ・（身体）の動きを高め、（想像力）を伸ばす。
- ・（体験）を通して学ばせる。
- ・（フェア）プレーの精神と（正義感）を養う。
- ・愛と（感謝）の心を育てる。

①の部分が空白だったが、書けたのは6カ所だけだった。改めてこの目標を、全ての活動に位置づけおき、その視点に基づく振り返りも必要だと感じた。

グループワークの課題は、子どもたちのよりよい進歩・成長のために、学校、家庭、地域社会はどのようなことができるか、その内容がカブスカウト活動のどのようなところで生かせるかを具体的に考えた。例えば、学校での音楽の授業がカブのソングにつながるとかと考えていくと、スカウティングが独立してあるわけではなく、子どもたちの成長のために、スカウト活動の特長を生かしながら3者と協力していくことが求められている。そのために、学校や家庭、地域でのスカウトの様子はどうか、子どもたちは何をしたいのかを知っておくことが大切だ。

このセッションでの自己評価もAである。コメントとしては「同じ問題意識を隊の他のリーダーと共有したいと考えるようになった。スカウトの学校、家庭、地域での様子を知ることが大切だ」と記した。

●セッション9＝進歩制度とプログラム

ここまで来て、原隊でのプログラムで進歩制度は、こなすだけに終わってしまっていることを改善したいという意識をもって、このセッションに臨んだ。子供の目線に合わせること。子供の発達段階は一人一人異なること。カブスカウトは集団教育ではなく個人教育であること。家庭との連携なしでは成り立たないこと。活動の目標を明確にすること。計画、実践、反省・評価のサイクルを回すことなどを再確認。その上で、進歩制度の運用の理想の姿を具体的に出し合い、現状とのギャップを整理して、課題（ゴール）を設定し、そのための解決策＝アクションプランを出すというグループ作業を行った。

うぐいす班では、課題として、次のようなモノが上がった。

保護者会を開いて進歩制度を理解させる。リーダーの勉強会をする。プログラム委員に保護者を巻き込む。

集会ごとに評価をする。誉めて誉めて誉めまくる。表彰の回数を増やす。進歩壁掛け表を使う。活動の意義を伝える。

学校をリーダーが見学する。学校のプログラムにリーダーが参加する。校長や学校の先生と会う。

これらの課題に対するアクションプランとして、リーダーが進歩に関して勉強をする、保護者とランチや飲み会で交流を図る、保護者も参加出来るプログラムを考えるーがあがった。

このセッションの自己評価もAとした。

2日目のセッションを振り返って、隊指導者の役割分担の方向性など、具体的なアイデアが生まれてくる。一気に組集会を目指すのではなく、組集会実施に協力が求められる保護者に理解してもらうため、保

護者とスカウトと一緒に参加出来る組集会和隊集会セットのプログラムを、96団の得意技であるロープワークで出来ないかなど、セッションを聞きながら思いつき、初日に書いた学習計画の用紙に書き加えていった。また、これまで副長として全体の運営は隊長にお任せしていた面があるが、その点ももっと考えていく必要があると深く考えるようになった。

3日目

●セッション10-1=指導者に必要な技能-1

ここでは、隊長として必要な技能について理解することが目標とされた。カブブックの修得科目に設定されている活動を、「食事に感謝、元気よく挨拶」などと具体的に全てあげ、それがスカウトの成長・発達にどう役立つかの効果・意義をワークシートに書き出す個人作業から始めた。(別紙)

進歩をプログラムに反映するというと、むりやりこなす形にするか、勉強風になるか、それとも家庭マークは家庭でこなしてもらうことを無理強いすることになりがち。96団では、無理矢理こなしてきたが、スカウトたちが納得して活動していたかは疑問である。上記を書き出す作業で、これらの項目が、スカウトを評価するポイントになることがよく理解出来た。また、このあとのグループ作業で、進歩科目は様々な形にプログラムに取り込むことが可能なこともよく分かった。つまり、評価するには意義を考えておかなければならないのであり、意義を考えておけば、さまざまなプログラムのアイデアも出てくるのである。

グループ作業では、具体的な集会プログラムを想定して、どんな方法で進歩科目の活動を取り込めるか考えた。うぐいす班は、まち探検の活動を想定し、51項目もの具体的な活動を発想し、時間があればもっと出てきそうだった。ここまでスカウト活動の意義、目標、方法などについて、同じ時間で考えてきたから可能だったわけで、普段から原隊のリーダー間で、活動の意義、目標、方法などについての意識合わせをしておくことの重要性を再認識させられた。これらが隊長として求められる技能であろう。

チューターやセッション講師のコメントとして、最初から集会の細かいことを考えるのではなく、頭をぐちゃぐちゃにしてイメージを膨らませること。例えば五感を養い、成長と発達に生かすという大きな効果を狙って、今できることとしの目先の効果を考え、さらに指導者としてよき大人に育てて欲しいという願い・思いがその背景にある。「技」を教えるのではなく、プログラムは手段であり、子どもたちが星稜するチャンスを与えるのであり、何に気を付けねばならないかを気付くことがこのセッションの目的とし、個々に適するモノ、全体に適するプログラムを与える能力を身につけて欲しいとされた。

ここでの自己評価は○Aとした。コメントとしては「一つひとつの活動にたくさんの目標があり、それが一つひとつスカウトたちへの評価軸につながるということが理解出来た」と記した。後に述べるが、4日目のプログラムでプログラム作りの難しさを感じていったんBに下げ、最終日にある種の見極めを持って再びAにした。

●セッション10-2=指導者に必要な技能-2

ここでは、プログラムにはかならず達成すべき目標があることを再認識することが目標とされた。指導者講習会で、ボーイスカウト活動を紹介するために見せている数分のBS活動の様子に含まれる教育的効果と、カブの隊長ハンドブックにある隊集会、組集会のプログラムに含まれる教育的効果を洗い出す作業をグループワークで行った。

BSの活動は、ロープの練習や班集会の様子、パイオニアリング、流しそうめんなどの様子が次々に映し出されており、まず、15の活動要素に分類し、うぐいす班ではあえて「流しそうめん」プログラムに含まれる教育的効果を洗い出した。計画力、実行力、自然の恵みへの感謝、チームワーク、思いやりなどなど、10余りの効果を読みとることが出来た。

また、組集会の実施計画書から、草花カードを使ったゲームでの観察力を養ったり、ソングを歌うこと

で所属意識や創造性をやしなったりなど、ここでも10余りの効果を見いだせた。

ここでの自己評価はAとし、「指導者、DLらとの目標共有がいかに大切か分かった」とコメントした。

●セッション10-3＝指導者に必要な技能ー3

技能のセッションの最後では、個人作業として原隊の集会の実施計画書を自己評価した。春の舎営を念頭に置いて、目標の達成度、教育的効果、運用方法やスカウトの動機付けの適切さ、スカウトや保護者の評価についてまとめた。

実際には、計画段階で集会の目標を明確に立てておらず、また共有化もしていないのが最大の問題点なのだが、要素を分析して目標をたて直してみても、(1)仲間意識の醸成、協調性の向上、(2)感謝の心を育てる、(3)地域の歴史の背景を知る、(4)自立心、責任感を養う、(5)時間を守る、(6)規律の維持、(7)組長の達成感、(8)食事を作り、食べてもらう-という教育的効果を整理してみたが、いくつかの点で準備不足やうち合わせ不足により、不十分だった点があったが、すべての項目でそれなりに効果があったと自己評価した。問題は、その目標を深めて共有していないことにより、いずれも不十分なままに終わっていると言える点であることを自己発見した。

また、運用方法では、追跡カードが風で飛んだり、他の来場者に持って行かれたりしたことや、夜間の肝試しのコースについてDLへの説明が不十分で、目標に迷った組があったことなど、改善を図るべき運用方法があった。時間がなく、ワークシートへの記入はここまでとなったが、多くの気づきがあった。

ここでの自己評価はAとし、一日のセッションを振り返って「保護者にプログラムの評価を継続的にしてもらおうことで、より深い関わりが可能になりそうだ。自己評価はなかなかしにくいので、隊指導者、DLの中で評価担当を置くことも、具体的に出来る。目標の共有化は、プログラム会議の場だけでなく、メールを活用してアイデアを出してもらおうことも出来るので具体化したい」と書いた。この考えが、奉仕実績訓練の計画書にもつながった。

●中間評価

この日の最後は、初日に作った自己の訓練ニーズである「自隊の課題の解決と学習計画」の各項目で、問題解決の手段を見いだせた項目と、引き続き研修すべき内容を整理した。

この段階で、具体的なアイデアがかなり頭に浮かんでおり、シートに書き出して行った。(・が付いているのは直ちに実践が可能)

(1) 隊の会議が十分出来ておらず、プログラムの組み立てに問題

- ・岩田副長に、会議・うち合わせのスケジュールを定期的にできるよう、調整をしてもらう。
- ・隊長に連絡が取れなくても、メール、FAXで連絡は絶やさないようにする。

(2) スカウトの人数が少ない

- ・春の組拡プロ、秋の団まつりは、地域に向けての組拡行事とする。

年間を通じた組拡プログラムを団として立案し、組織的に実施する体制を確立する。

(3) BVS 隊との会計や活動の分離

・CS年代は送迎なしに自立出来るよう、保護者の協力、交通安全プログラムを行う。秋にお家ハイクで周辺の地理を把握できるようにする。

隊としての会計が出来る体制を取る。団やBVS隊の合意を得る。

(4) 組集会が出来ていない

- ・親子でセット参加出来る組集会+隊集会のプログラムを考える。

保護者の理解と協力を求める。

DLをできるだけ複数年やってもらう。

B S 隊にDCの派遣で協力を求める。

プログラムを深化させる。

(5) プログラムにみんなのアイデアが活かせていない

・(保護者により関心を持ってもらうため) スカウトの家庭、学校、地域での様子を知るために、保護者に対してアンケートを実施し、保護者会で報告する。

・集会の最後に、スカウトに自己評価をさせる。

・リーダー内で、評価記録を付ける。

・保護者に集会を見学してもらい、良かったところ、気になった所などの評価もしてもらい記録撮影担当をもらう。

・評価の結果は、プログラム作りに反映すると共に、配布する月間プログラムに声を取り込む。

・プログラムに教育の目標を書いておく。

・リーダー会の定期開催。

・保護者会の定期開催。

4 日目

●セッション 1 1-1 = プログラム企画 1

まず、基本的なこととして、目標=教育効果に向かって展開するためにプログラムがあること。さらにカブの場合は3年間のプログラムがあり、当該年度のプログラムがあり、月間プログラムがあり、その上でそのプログラムを組み集会和隊集会で組み立てるという流れであるという説明があった。日付を決めて、適当に活動を割り振っているだけの96団(西宮でもそうだったが)との実態との乖離は大きいと改めて感じた。

個人作業として、プログラムの企画をする上での会議の持ち方について、隊長ハンドブック76ページ以降の部分、またまた穴埋め書き込みのワークシートに記入した。穴埋めする言葉がある程度用意されていたこともあり、大半は埋めることが出来たが、年プロを考える前に、さまざまな場面で意見を積み重ねる必要性が改めて確認出来た。

その上で、原隊のプログラム作成の方法に何が欠けているかをノートに書き出していった。

・組集会所のもの(隊集会所は組でやったことを自慢する場である!)

・スカウトのニーズ/評価の吸い上げ(保護者へのひみつもプログラムのミソになる)

・保護者のニーズ/評価の吸い上げ(たくさんのアイデアが出ると大変だが、次につながる)

・年間、月間活動の評価/反省

・定期的なリーダー会議、プログラム委員会

・デンコーチの存在

・プログラム後の組長会議(前も不十分)

・年間/月間目標の明確化=教育効果が不明確

ここで、またいくつかの改善アイデアを思いついた。

*クマスカウトに春頃、アンケートを取る。彼らには、夏の終わりのプログラムを彼らのニーズベースにするためでもあるが、来年度以降のプログラム改善が主目的にする。

*保護者にもアンケート方式で評価してもらう。毎月の担当をお願い出来ないか。

ここから先が、うぐいす班のグループ作業となり、年プロ会議、リーダー集会所を部分的に再現する形で、2カ月のプログラム案を考え、そのいずれかを選んで月間プログラムの立案をして、リーダー集会所のう合わせ用紙、隊集会所の実施計画書、組集会所の概要までまとめた。我々は「春とともだち」というテーマで、里山ハイクをメインに植物観察、たけのこ掘り、ネイチャーゲーム、スケッチなどを実施したいと考えた。

各グループのプログラム案のうち、1つを選んで、午後から実際に組集会、隊集会を実施するという。隊集会の時間は40分程度しかないとのことだったが、あまりその制約を考えずに、実施計画の立案を進めた。

ポイントは、組集会で里山にありそうな植物を図鑑などで調べてスケッチを描いておき、(1)自然の中で本物を探してスケッチをする、(2)みんなが書いてきたものと本物のスケッチを並べて神経衰弱ゲームをする-という部分と、自然のモノを生かしたネイチャーゲームとした。

6グループ、各3分以内で発表して、相互に選び合ったところ、半分のグループから支持を得てしまった。この段階では、ビックリだけだったが、隊集会の詳細な実施計画書と、他のグループが組集会のプログラムを作れるような企画書を作らねばならなくなった。

ごく短時間に、しかも最初の考えに時間的制約を入れながら組み直す作業を昼食時の意見交換を経て昼食後に他のグループと違う作業を進めた。ここまでがセッション11-1だった。

この段階での自己評価は、最初はAだったが、夕方の段階では混乱してCになり、翌日、落ち着いてまたAに戻した。

●セッション11-2＝プログラム企画2

時間がない中で、チューターのサポートをめいっぱい受けながら、プログラムのパーツごとに役割分担をして作業を進めていたが、分担する段階でのうち合わせが不十分で、各持ち分の時間が分からないまま放り出して、隊長役の笠井さんと、副長役の原田君、チューターに調整させてしまうことに。頭の中の回転と、全体の進行がかみ合わなくなって、一人でパニックしてしまったところがある。不十分な実施計画を説明したところ、各グループ(組)からツッコミがたくさん入った。これは、実際には隊指導者とデンリーダー、デンコーチのやりとりの再現となるのだろう。

進行上、他のグループは途中まではグループ内でデンコーチ、デンリーダーを務めてもらって組集会をしておいてもらい、隊集会時にはうぐいす班からデンリーダーを派遣するというのも、我々も各グループも意味がよく飲み込めなかった。各グループ＝組ごとに、組集会でスケッチを描いてきてもらったうえで集合し、サイト内をちょこっと歩いてハイキング気分を出し、半分に切ったスケッチの神経衰弱と、袋の中に入れていくつかのモノを触って当てる五感ゲームをやってもらった。笠井さんと福田君のアドリブのすばらしさで何とか破たんせずに乗り切った。他のグループの指導者も、原隊のスカウトの様子を思い出しながら、チャチャを入れてくれたので、より実施側のうぐいす班はあわてさせられたのも勉強になった。何にせよ、準備不足、うち合わせ不足ではスカウトに満足してもらえないということである。

自己評価は、とりあえずBとした。

●セッション11-3＝プログラム企画3

まず、グループ作業で、今実施したプログラムについての反省を行った。「よいプログラムの要素として季節感があったが、スカウト年代のニーズを満足させられた」などを考え、さらに活動の目標が達成出来たかななどをまとめた。

目標に対しては、本物の自然にもっと触れられるようにしたかった。ゲームのルールの説明が不十分だった。組集会の総括が出来ていなかった。リーダー会議が不十分だった-などなど、たくさんあげられた。

さらに自己評価として、原隊のプログラム企画で改善すべき課題をノートに書いていった。

・対スカウト：評価してもらうこと⇨ニーズの吸い上げ。組集会の実施→プログラムをもっと掘り下げる、動機付けになる。、対リーダー：目標の共有、評価、対保護者：評価⇨参画、自分自身・目標の明確化、自己評価

・年間プログラムの作成で、スカウト、保護者の評価を反映していない。

・約束、さだめを実践するためとしての11の目標に基づくプログラムの目標の確認と共有があり、その上で毎月の活動の評価反省があり、年間の評価反省がある。まず、リーダー、保護者共に、現状とあるべき姿のギャップがあるという認識を共有すること。

ここでの自己評価は○Aとしている。振りかえりの記述として、「これまで具体的なプログラムのことしか、せいぜい進歩過程のことしか考えられてこなかった。こなしてきたに過ぎないことは分かってはいたが。目標の共有／評価について、これだけのレベルの指導者が同じ班にいてなお、この程度のことしか短時間では出来ない。プログラム自体は、ちゃんと考えれば出来るが、問題はまず評価が合っこそ、次のステップである」と記した。意味不明のところもあるが、「評価」が欠けているということ強く感じた。

5日目

●セッション12＝コミュニケーション

ここでは、コミュニケーションの概念的なことを触れ、コミュニケーションは開示が前提であり、情報の共有だけでなく気持ちや価値観の開示が必要だと指摘された。

言葉よりも言い方、さらに表情や態度のほうに伝わるということや、人の話をきくというのは、訊く＝尋問調、聞く＝ただ聞く、聴く＝耳を傾けて聴く（心が入っている）、さらに傾聴するという4つがあると、積極的傾聴という言葉が心理学では使われているという。話し手として、聞き手としての留意点についての注意があった。「話したことを説明したくなり、長々とした話になる」や、「心の中で話の先を予習してしまう」など、思い当たるところがあった。解釈的や、評価的、調査的、指示的、支持的な態度で聴くのではなく、理解的な態度が望ましいとされた。

体験学習として、3人一組で話し手、聴き役、観察者となり、話し手が5分間、自由に話した後、聴き役が1分間で話の概要説明、1分間で自分の感想、観察者が聴き役の聴く姿勢について1分間でコメント、最後に話し手が1分間で聴き方についてのコメントをした。

最後に、言葉あそびだが「カエル運動」という話があった。「あと1日で皆さんは帰るのですが」との前置きで、自分自身を変える、初心／原点に戻る、視点と立場を換える、方法・手段を改める、大人を目線を子供の視線に代える、組み合わせを替える→金のたまご（スカウト）が孵る-とした。

このセッションの自己評価はBとした。Aは「自信がついた」とあり、Bは「大切さが分かった」であるため、コメントとして「この点は常にもっともっと向上させていくべき項目である。個々に自信を持つてはいけないとも考える」と書いた。

●セッション13＝世界のスカウティング

若干の講義の後、カブ年代で実践出来る国際理解教育のプログラムについてを考えた。グループワークで、アイデアを出し合った。これも、そのまま使えそうなアイデアがたくさんあった。

- ・カード合わせで国名、国旗、首都名、挨拶、輸入品。神経衰弱にする方法も。
- ・100円ショップのローマ字記入の地球儀を使う（確かにありました）
- ・海外旅行に行った保護者らの話を聞かせてもらう。
- ・外国から来た人に、その国の料理を作ってもらって食べる。
- ・ピースパック、ユニセフ募金などをする。
- ・世界のスカウトの仲間の人数を調べて、地図に張り出したりする。（団、地区、県連、日連という段階ごとの地図も面白い）
- ・ワールドカップの時に、参加した国のことを調べる。
- ・地区ラリーで、各国のブースを作り、衣装を着て、食べ物を提供する。
- ・カレーに好きな国の何かの材料を加えて、○○風にする。

- ・切って、コインを収集している保護者に協力をしてもらい、世界の国々を知る。
- ・輸入材料による料理をする。できるだけたくさんの国で集める。(逆に、地産地消というのもあり)
- ・買い物でたくさんの国から入ってきたものをしらべる (なかなか触ったりしにくいので難しいかも)
- ・世界の踊りや歌を知ってやってみる。
- ・動植物の分布を調べる。
- ・世界地図をダーツで狙う。
- ・なんちゃってNOVA。毎回の集会ごとに、隊長が違う国の言葉で挨拶をして、それをみんなで覚える。

ここでの自己評価はAとした。「たくさんのアイデアをいただきました」とコメントした。

●オープンフォーラム

昼食を挟んで、6つのテーマで関心がある人同士が集まって意見交換をするオープンフォーラムが行われた。

- ・保護者の意識改革、具体的な取り組みを探る。
- ・女子スカウト加入
- ・安全管理、集会前後の事故の責任は？
- ・こんなたのしいカブスカウトがいます
- ・女性リーダー集まれ
- ・組、隊集会でお悩みのリーダー

私は「保護者の…」のセッションに参加した。ここが一番人数が多く、さらに5-6グループに分かれ、私は4人+所員で話をした。参加者が、それぞれ苦勞していることが分かったが、特効薬もないことも改めて分かった。

集会前後に保護者と話をする時間を持つことや、活動の見学会を持つこと、保護社会で活動の目標を話すことなどを、実践していきたい。

●セッション14＝スカウティングと地域社会

グループワークで、地域社会からボーイスカウトはどう見られているかを出して発表し合った。「掃除をする人たち」「募金をする人たち」「軍隊的、右翼的」「宗教的な団体」「礼儀正しい団体」「うさんくさい」「入ると保護者が大変」などなど、いろんな見方をされていることが、改めて相互理解出来た。

さらに、どんな地域社会の活動に、我々が参加出来るかを出し合い、行事などに参加する目的や、どんな効果があるかを整理した。地域行事に参加する際に、スカウトに対して奉仕と言うだけでなく、どんな目的があるのかを伝えておくことが大切だとの指摘があった。

ここでの自己評価はAで、コメントとして「活動が大きな展開をするために重要なことである」と記している。

●セッション15＝指導者の役割と責務2

改めて、指導者として、青少年をよりよき社会人に育てるために、指導者の役割と責務を理解し、その意味と重要性を説明出来るだけでなく、企画/立案力、実施能力、活用/応用力、人間関係を深める能力、スカウティング技能という技術を改善していくことが求められているという話の後、奉仕実績訓練についての説明があり、自己研修計画の立案を行った。この日は営火が予定されており、夕食も作らねばならぬため、研修計画の用紙への記入がほとんど進まない段階でいったん、中断し、営火の後に、継続して立案、記入を行った。

奉仕実績訓練の課題は、1つ目が近いとおきてを活動の中でどのように実践したかの具体事例の記述、二つ目が実務訓練として自隊の問題点の解決法の立案と実施結果、3つ目が自己研修計画の進行状況や結果報告である。このうち課題3が最も大変であり、実践として詳細に書かねばならないものである。

あれもこれもと書いてしまいがちだったが、チューターからの助言もあり、実践出来ることを積み上げていくように書いていった。訓練ニーズとしては、(1)保護者に集会評価担当をお願いする、(2)親子で参加出来る久美集会、隊集会を実施する-の2つを上げ、1について、詳細なステップを考えた。

営火、入浴を経て、「短い文章でやることを具体的に書く」など、チューターの指導を得ながら記載していったが、うぐいす班のメンバーは書き上げるのが最も遅くなり、サイトに戻ったのは日付変更線が過ぎていた。

ここの自己評価はAであり、「いよいよ、これからである。難しいことも多いが、自分の周囲を信じて、焦らず、じっくりと進めたい。そこに最善の道があるはずである。これは（抱え込んでしまいがちな）自分への戒めでもある」と記述した。

- ・訓練ニーズ=保護者に集会評価担当をお願いする
- ・目的（自己研修計画書にはないが）=保護者にスカウト活動の目的について理解してもらおうきっかけを得る。プログラムへの参画をしてもらおうきっかけを得る。デンリーダーなど指導者としての奉仕をしてもらおうきっかけを得る。最も有効な組拮方式のロコミを積極的に展開してもらおうきっかけを得る。
- ・どのような方法で研修に取り組むか、それぞれ誰から支援を受けるか、その機会や場所、期間は=
 - 1：WB 研修報告書を作成する。チューター/長田さん、Email、1週間以内
 - 2：保護者の評価担当者導入の計画書を作成する。アンケート形式の記入用紙を作る、チューター、Email、1週間以内
 - 3：団委員長に対し、1，2を元に奉仕実績訓練の計画を説明し、了解を得る。団委員長、面談、できれば5月9日の団会議の前
 - 4：カブ隊長に、1，2の資料と団委員長のアドバイスを元に、計画を説明し、了解を得る。団委員長、カブ隊長、面談、できれば5月15日の地区キャンポリーの下見までに。
 - 5：リーダー会議で同様に計画を説明し、協力を求める。カブ隊リーダー、ファミレスなど、できれば5月15日の地区キャンポリーの下見までに。
 - 6：毎回の集会後に、「今日はどうだった？」とスカウトに必ず聞くことを始める（これを記録する用紙を準備する）。スカウト、デンリーダー、各集会時、5月16日の集会以降
 - 7：毎月のプログラムの活動報告欄に、活動の目標と成果、反省について必ず盛り込む。デンリーダー、、6月のプログラム以降。
 - 8：団会議で、集会評価担当を置くことを説明し、活動同行時の費用を隊持ちにする了解を求める。団委員/他隊リーダー、団会議、5月か6月の団会議。
 - 9：保護者会を開催し、評価担当を置くことへの協力を求める。保護者、カブ隊リーダー、千秀センターなど、できれば5月中。
 - 10：集会に保護者の評価担当に参加してもらう。保護者、各集会の場所、6月の集会以降
 - 11：毎月のプログラム報告に、保護者からの評価も掲載する。保護者、、7月のプログラム以降

- ・訓練ニーズ=親子で参加する組集会を実施する
- ・目的（自己研修計画書にはないが）=保護者、デンリーダーに、組集会の意味を理解してもらい、組集会になれてもらおうきっかけを得る。保護者にスカウト活動の目的を理解してもらおうきっかけを得る。
- ・どのような方法で研修に取り組むか、それぞれ誰から支援を受けるか、その機会や場所、期間は
 - 1：保護者も参加出来る久美集会、隊集会の複数のアイデアをまとめる。カブ隊リーダー、リーダー会議

やmlで、5月中

2：保護者会で、意見を聞いて集会の内容を決定する。カブ隊リーダー、保護者、千秀センターなど、できれば5月中。

3：組集会での成果を元に、保護者とスカウトが組ごとに協力して競い合う隊集会を行う。スカウト、保護者、6月か7月。

●営火

小雨の中で、白雲閣という名の付いた屋根のある場所で、実施した。グループごとのスタンツも、研修所レベルとは異なり、それぞれにパワフルで、役者がそろっていることを実感させられた。うぐいす班は、私の提案でBPスピリットの振り付きソングをドゥアアップコーラス風にやり、それぞれがPBのスピリットがどう身体に染みついているかを、半分は真面目に、半分は受け狙いでセリフをいうスタンツを展開し、好評だった。

6日目

●徹営

あいにくの雨となり、乾燥したうえでの収容ができなかったため、テント類は倉庫の入り口にある竹に下げて乾燥させることになった。他の資機材の数を確認して返却した。班内で担当分けをして作業をし、私は炊飯関係の資機材を片づけたが、鍋類の焦げ落としに時間がかかって、他の人の応援を求めた。2日目まではコーティングを重ねていたが、その後はあまりやられなかったため、すすがかなり付いてしまっており、やはり基本はちゃんとやっておく必要性を実感した。

ばたばたと撤収をしたため、スプーンフォークセットが荷物の中になかった。以前、BSの研修所でアーミーナイフが行方不明になっており、同じようなことをしてしまった。うぐいす班は、片付けも最後になってしまった。どうも、プログラム企画で選ばれてから、進行が遅くなったような気がする。

閉所式では、履修書を受け取り、所員全員と握手をしたが、まだ奉仕実績訓練が残っており、研修所でウオググルをしてもらったときほどの達成感はなかった。終わったわけではないので当然ではある。うぐいす班は、チューターや生活担当所員らと記念撮影にいそしんだ。

雨がやんで、薄日が差してきたので、昼食は支給された弁当をコース広場で食べ、最後にサイトに戻って荷物の最終的な整理をして、サイトでも記念写真を撮影した。笠井「隊長」の「空を見上げてみて」という得意技の伝授も受けた。

帰りの新幹線も、うぐいす班は全員東京まで同じ列車に乗り、東京駅でさらに西に行くメンバーと再開と互いの健闘を誓いあいつつ、別れを惜しんだ。

●その他の「おみやげ」

営火

出ばやし (バンバンババンバ、バンバンバン。バンバンババンバ、バン。ウッ。ピピピピーピピ、ピピピピーピピ、ピピピピーピピ、はいポーズ)

カエルの夜回り (ビーバーのソング) の振り

ワイドゲーム

- ・ピラミッドジャンケン
- ・リスとオオカミ

組対抗ゲーム

- ・帽子リレー
- ・タケノコニョッキ